

『パウロの願い①』

'22/06/19

聖書箇所：エペソ人への手紙 3 章 14-16 節（新約 p.376）

パウロがこのエペソ書を書いたのは、小アジアの教会が、この神様の素晴らしい恵みというものを、益々、しっかりと理解していくためでした。そして、その理解によって彼らの生き方が変えられ…、そんな彼らを通して、神様の偉大さ、素晴らしさ、恵みの大きさといったものが現われ…、もともと多くの人々が救われていく…。そういったことがパウロの願いでありました…。

私たちは、これまでに見てきたような、神様の恵みの大きさ・素晴らしさというものを見ていく度に、誰一人として、そのような神様の恵みを受けるに相応しくない存在であることに気付かされたはずで…でも、だからこそ！ 私たちクリスチャンは、神様に感謝し、喜んで生きていくことができるのです！

そのように、「神様に関して、また、救いに関して、そして、神の真理というものに関して、正しい理解を持っていてほしい！」というのが、1 章にあったパウロの祈りの内容でした…。その、エペソ 1 章(1:15-23)の内容を見ますと、救われて、神様の祝福や聖霊なる神様の内住というものを頂いた私たちは、神様から与えられた務めをなしていくために、必要な力などは、もう既に与えられているということでした。つまり、私たちが、この地上にあって…、これだけ罪に満ち溢れた世の中にあっても、神様に喜ばれ…、周りの人々に良い影響を与えていくための必要なもの全てはもう既に与えられている、ということです！「問題は、その与えられた力を用いないで歩もうとする…、私たちの側にいるのだ」というようなことを、パウロは教えてくれているわけなのです。

命題：パウロが父なる神に祈っていた内容とは？

実は、今日からしばらく学んでいく内容も、基本的には、そういったことです。パウロの祈りは、こうではありません、「神様、どうか、私や他のクリスチャンたちが、神様から与えられた務めを全うすることができるように、必要な力を…、また、どうぞ賜物を与えてください！」…何故なら、神様はもう既に、私たちにに対して、霊の賜物、すなわち、神様の御栄えを現わすための…、また、奉仕をするための特別な賜物を、私たちがイエス様を信じた、その瞬間に与えてくださったからです。

じゃあ、どんなことを、パウロは、ここエペソ 3 章後半で祈ってくれているのでしょうか？ 今日から、私たちは、パウロが父なる神様に祈っている内容について、皆さんと一緒に学んでいきたいと思えます。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、エペソ 3:14-16 をお開きください。

I・救われたクリスチャンが、益々、成長していくように！（14-16 節）

まず、パウロの願いの第 1 番目のものは、神が私たちに与えてくださった内なる人が、神様によって強くされますように…、つまりは、救われたクリスチャンが、益々、成長していくようにということなのです。エペソ 3:14-16 までをお読みします。

14 こういうわけで、私はひざをかがめて、

15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。

16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいように。

① 祈りの 姿勢 について…

まず、この箇所、パウロは、自分自身の祈りの“姿勢”について教えてくれています。14 節にある、『こういうわけで、私はひざをかがめて…』という部分がそうです。しかし、一体何故、パウロは、このような祈

っている時の姿勢をわざわざ書いたのでしょうか？ まずは、そのことについて考えてみたいと思えます。

実は、この当時のイスラエルでは、「祈りというものは立って祈るというのが、一般的な祈りの姿勢であった」ようです。…と言いますのも、例えば、ルカ 18 章に出てくる例え話ですが、あのパリサイ人と取税人は、2 人も立って祈ったと、イエス様は話されました…。また、イエス様ご自身も、祈りについて教えられた、マルコ 11:25 で、『また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があつたら、赦してやりなさい。…』とおっしゃられました。また、「山上の説教」では、『偽善者』とあって、これは暗にパリサイ人を指すわけですが、彼らパリサイ人たちもまた、『人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好き…』（マタイ 6:5）だと、イエス様が話しておられます。…このように、この当時、祈りと言えば、普通は立って祈るというのが一般的な感覚であったようです。

しかし、聖書全体を見ますと、数は少ないですが、例外的に、ひざをかがめたような姿勢で祈ったということも書かれてあります。例えば、旧約のソロモン王様は、神殿を建て終わった時、その献堂式で、ひざまずいていたと、みことばは教えています（I 列王記 8:54）。また、バビロンに捕囚されたダニエルも、『…彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。』（ダニエル 6:10）とみことばは教えています。また、詩篇 95:6 には、『来たれ。私たちは伏し拝み、ひれ伏そう。私たちを造られた方、【主】の御前に、ひざまずこう。』と教えられています。

また、新約の時代にあっても、ペテロが、タビタという敬虔な女性の信者が病死した時、『ひざまずいて祈った』（使徒 9:40）とあります。また、パウロ自身も、ミレトという町で、エペソの長老たちを呼んだ時、皆と一緒に、ひざまずいて祈ったようです（使徒 20:36）。最後に、イエス様も、あのゲツセマネで祈られた時、『ひざまずいて』（ルカ 22:41）、『父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。』（ルカ 22:42）と祈られました…。

こういったような状況を見ますと、「ひざをかがめて祈る」というのは、パウロやイエス様がただ何となく行なったというようなものではなく…、どちらかと言うと、その祈りの課題を覚えるにあたって、その深い感情と言うか、真剣さ、神様への熱心さというようなものが現われた結果のように思われます。ですから、今日のみことばで、パウロが、『私はひざをかがめて』祈った、と言った時、それ程パウロは真剣に…、また、切なる思いでもって、神様の前にへりくだって祈りを捧げたということを教えてくれているはずなのです。

そう考えると、この、『私はひざをかがめて…』という文章の前に、『こういうわけで…』という言葉がある理由も納得いきませんか？ …これは、これまでに学んできたような…、特に、2 章の内容を受けての…、神様の素晴らしさに対する、パウロの大きな感動や深い感謝が現われているのです。

さて、じゃあ、私たちは神に祈る時、このように、心から神をあがめ、神の偉大さというものを覚えて、ひざまづくほどの思いをもって祈っているのでしょうか？ 実際に、ひざをつくかどうかという話ではありません。ひよとしたり…、私たち、ただ何となく、食事の前だからとか…、寝る前だからとか…、「まあ、祈ろうか…」と言ったような…、そのような軽い気持ちで祈ってしまっていることに気付かされませんか？

皆さんはいかがでしょう？ …果たして、皆さんにとって、祈りというものは、神様から与えられた「大きな特権」となっているのでしょうか？ また、祈る時、皆さんは心から神様を覚えて意識しておられるのでしょうか？ …ひよとしたり、「ただの習慣」になってしまっていないでしょうか？

パウロは教えてくれているのです！ 「もし、私たちが順調にクリスチャンとして成長しているのなら、神様に対する真摯な思いや、その神様に祈りを捧げることができるという感謝が強まっているはずで…」って…。⇒確かにそうです！ この神様を知れば知るほど…、また、その神様に祈りを捧げることができるということの素晴らしさやありがたみを知れば知るほど…、私たちは決して、いい加減な気持ちで祈ることはできなくなるはずで…、そういったことを、私たちは、このパウロの祈りに対する姿勢から学ぶことができるのです。

② 祝福 を与えてくださった神に感謝しつつ…

今日のみことばの 15 節では、『天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。』とあります。当然、パウロが、神様のことを、こんなに長い説明を付けたのにも意味(=理由)があります。実はここで、『家族』と訳されてある言葉ですが、この言葉は、「πατριά」(パトリア)というギリシヤ語で、父親を意味する「πατήρ」(パテル)という言葉から由来している言葉なのです。そういったことが分かると、パウロが、神様のことを、『天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である…』と表現したのも納得がいきませんか？…つまり、パウロは、言葉で説明するだけでなく、実際の歴史と言うべきものを例に挙げて、「私たちの源は、この父なる神様にあるのだ！」ということを教えてくれているのです。

また、ここで、『名の元である…』と訳されている言葉(ὀνομαζέω)は、「名付ける、命名する…」というような意味の言葉です。…ですから、この個所を違う風に訳すると、「家族と呼ばれる、すべてのものの名を与えられた父の前で祈る…」ともなります。パウロは何を言っているのでしょうか？ここにある、『天上と地上で…』という言葉は、『家族』という言葉に修飾+説明していますよね。少し前の、エペソ 2:19 で、『こういわけて、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。』とあったように、この『家族』という言葉は、救われて神の家族とされた、クリスチャンたちを指しています。クリスチャンの中には、もう既に、天に上げられたクリスチャンも…、今地上で生かされているクリスチャンたちも居ます。そのことを、パウロは、『天上と地上で家族と呼ばれるすべてのもの…』と言っているのです。

そのクリスチャンである私たちクリスチャンには、実は、神様によって新しい名前を与えられました…。これは、カトリックなどがするような…、クリスチャン名とか、洗礼名などのことではありません。旧約では、神様がアブラムに対して、「アブラハム」という名前を与えられ…、その妻サライには「サラ」と改名されました…。また、新約の時代には、「パウロ」もかつてはサウロと呼ばれていたことが分かります。結局、どうかかと云いますと、信仰をもって、神様に従っていこうとした時、神様は、その者たちに新しい人生、新しい生き方を与えられた！ということなのです。

創世記 2 章を見ても、アダムの動物たちの名前を付けるために、何と、神様がすべての動物たちをアダムの前に、『連れて来られた』とあります。実は、それは、神様が人間に対して、創世記 1 章で、『…すべての生き物を支配せよ。』と命じてくださったことと関係があるのです。つまり、名前を付けるということは、明らかに、名前を付ける者は、名前を付けられる者よりも優位に立っている、ということを示します。現代でも、親が子どもの名前を付けるのは当然ですが…、例えば、芸能界などでも、師匠が弟子たちの名前を付けたりしますよね。…そのように、名前を付けられるということは、その下につくということであり、そこから、その者の新しい生き方が始まるということなのです。…ですから、バビロンに捕囚されたダニエルも、当時のバビロン王によって、全く別の名前を付けられたのです。

つまり、パウロが、ここ 15 節で教えるようにしているのは、私たちすべてのクリスチャンたちに対して、新しい名前や新しい家族…、また、新しい人生というような祝福を与えてくださった神様に、私は祈っているのだ！ということなのです。神様がすべての祝福の源であるという理解と感謝を、パウロは常に持っていたのです。…このように、天の神様は、私たちクリスチャンに、新しいいのち、新しい人生を与えてくださったのです。

③ 神様が、私たちに 力 を与えてくださる！

どうぞ、今度は、今日のみことばの 16 節をご覧ください。『どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊

により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。』⇒ここで、ようやく、パウロの祈禱課題と言うか、はっきりとした願いが出てきます。…以前学んだように、それをなして下さるのは、『御霊』、つまり、聖霊なる神であると言っていることは分かります。しかし、よく見てみますと、『どうか父が…』という主語がありますように、究極的には、父なる神様が、聖霊を用いてと言うか…、聖霊に働きかけてくださるということです。

そういったことは、聖書のいろんな個所に表わされています。聖霊だけでなく、イエス様に対しても同じです。例えば、私たちの救い主となってくださったイエス様をこの地上に送ってくださったのも、実は、この父なる神様ですよ？どうぞ皆さん、ヨハネの福音書をご覧ください。ヨハネ 5:36、『しかし、わたしにはヨハネの証言よりもすぐれた証言があります。父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしがやっているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。』とあります。また、続ヨハネ 5:37 でも、『また、わたしを遣わした父ご自身がわたしについて証言しておられます。』とあります。次に、ヨハネ 5:43、『わたしはわたしの父の名によって来ました…』とありますし、最後、ヨハネ 6:44 でも、『わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。』とある通りです。

このように、私たちの救いに関しても…、また、恐らく、その他の多くのことに関しても…、実は、父なる神様が様々なことの発端であり、原因なのです。父なる神様とは、そのように偉大で、何よりも素晴らしい御方なのです。これまでも、私たちはたくさん見てきましたように、父なる神様は、愛においても…、憐れみにおいても、正しさにおいても…、そして、厳しさにおいても、父なる神様は最高の…、また究極の存在なのです！だから、パウロは、このエペソ書の 1:7 でも、1:18 でも、2:7 でも、そして、3:8 でも、同じような言葉を使って、神様が御持ちの力も、知恵も、恵みも、無限のものであり…、それ故に、神様は、なんと私たちのような者にまでそれらを分け与えてくださる言うのです。だから、ここ 16 節でも、『その栄光の豊かさに従い…』とあるのです。それほどまでに、神様の愛や恵みというものは満ち溢れている！ということなのです。

パウロの願いは、ここにあるように、私たちの、『内なる人』が強くなることでした。それは言い換えると、『内なる人』が御霊によって、益々、強められることによって成長していく！ということなのです。つまり、これは、私たちの内に与えられた新しい性質が益々成長させられていくということ…、言い換えれば、「クリスチャンの聖化」なのです。

この、『内なる人』という表現を、パウロは、II コリント 4:16 でも紹介してくれています。『ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。』⇒ここで言われている、『外なる人』と言うのは、私たちの古い性質の部分です。つまりは、表面的な肉体を指すでしょうし、また、持って生まれた欲望や罪なども指すかも知れません。しかし、その逆に、『内なる人』とは、私たちに与えられた新しい性質のことです。御霊(=聖霊なる神様)が、私たちに、罪について…、義について…、裁きについて教えてくださったから、私たちは真の神様を知ることができたのです。その時、私たちに、そのまでは無かったはずの…、別の新しい性質が生まれたのです！

じゃあ、私たちの『内なる人』が強められた時、どのようなことが起こるのでしょうか？私たちの実際の生活にどのような影響があるのでしょうか？⇒私たちは日々の信仰生活の中でよく、「私は信仰が弱い…」とか、「私には力がない、勝利ある信仰生活が進まない、すぐ誘惑に負けてしまう…」といったような、悩みに陥ります。このような経験は、多くのクリスチャンが持つものです。今日のみことばは、このような悩みに対して、

ある種の答えを与えてくれています。みことばは教えてくれています、「神とは不可能の無い御方である！」と…。『どうか父が、その栄光の豊かさに従い…』とあるように、神様がどれほど栄光に満ちた御方でいらっしゃるか…。その神様が私やあなたに力を与え…。助け…。必要を与えてくださるのだと、みことばは約束してくれています。しかも、その神様が、『御霊により…』とあるように、これまた、全能の聖霊なる神様を用いて、私たちを強め励ましてくださるのです！…私たちのどのような問題にも、それに対処できるだけの力と、助けを与え、勝利ある信仰生活を歩めるように、神様がしてくさるのです。

じゃあ、具体的に、私たちは、どうすれば良いのでしょうか？⇒『御霊により、力をもって…』とありました。私たちを強くし、弱った心を励ましてくれるのは聖霊なのです！それこそが、神様の使われる手段です！この『力』(δύναμις)とは、「聖霊の力」を指していますが、あの「ダイナミト」という言葉の語源でもあるのです。そのような偉大なる力をもって…。皆さんの『内なる人』は強められ…。その力によって勝利ある信仰生活を送っていくことができる！とみことばは約束してくれているのです。

どうか、皆さん。聖霊の働き…。聖霊の力とはどのようなものだったか、思い出してみてください。⇒皆さんもよくご存知のように、イエス様が昇天される時、イエス様は弟子たちに対して、使徒 1 章で、こうおっしゃられました。『4 …エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。5 ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。』(使徒 1:4-5)とおっしゃられました。そして、あのペンテコステの日に、イエス様が約束してくださった通りのことが起こりました。つまり、その日を境に、聖霊なる神様がイエス様の信じるクリスチャンたちの内に住んでくださって、当時、エルサレムに住んでいたクリスチャンたちが急に外国語で話し出したのです。…そうだったでしょ？

また、イエス様は、こんなことも約束してくださいました、『しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。』(使徒 1:8)って…。実際のところどうだったでしょう？⇒確かに、イエス様の約束通りでした！…というのは、それによって、ユダヤ人たちを恐れていた弟子たちが、勇気をもって出て行くようになったからです！そして、イエス様の予言された通り、キリストの福音は、「エルサレムから始まって…。ユダヤとサマリアの全土、および地の果て果て…。もうこの地上に、福音が伝わっていない地域などはほとんど無いほどです。

だから、もうすぐなのです！世の終わりは、もうすぐそこまで来ています。だって、マタイ 24:14 には、何と予言されていますか？『この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。』⇒皆さん、ここにはっきりと約束されていますでしょ？福音が、全世界に宣べ伝えられるって！そして、その後、世の終わりが来るのです！正直言って、今から 500-600 年前に、世の終わりは来るはずがありませんでした。…と言うのは、この日本にも福音が伝わっていなかったからです。しかし、今はどうでしょう。聖書の言葉は、2200 以上の言語に翻訳されているそうです。インドネシアにあるような…。数百人ほどの部族しか使わないような…。そんな言葉にも翻訳されて、福音が伝えられているのです。まさしく、イエス様の予言通りです！もう、すぐそこまで、世の終わりが来ています。

ちなみに、私たちの聖書理解では、ここで言われている「世の終わり」と言いますのは…。イエス様が空中にまで、私たちクリスチャンを迎えに来てくださって…。その後、苦しい「患難時代」と呼ばれるものが 7 年間続きます。その後のことです！空中再臨の時、天に挙げられなかった人たちは皆、その苦しい時代を…。激しい迫害の中を歩いていかないとイケないのです。もし、その時のことをお知りになりたい方がいらっしゃいましたら、黙示録 4 章以降を読んでみてください。

使徒 4:8 には、このように記されています。『そのとき、ペテロは聖霊に満たされて、彼らに言った。「民の指導者たち、ならびに長老の方々。」⇒このように話してから、ペテロはメッセージを続けていきます。その少し後の使徒 4:13 で、それを聞いた民の指導者たちは、『…ふたり(=ペテロとヨハネ)が無学な、普通の人であるのを知って驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかって来た。』とあります。聖霊が、専門的な律法を学んだことがないような彼らに力を与え、話すべき言葉を授けてくださったのです！だって、イエス様は、前もって、弟子たちにこんな言葉も残してくださったでしょ？ルカ 12:11-12、『11 また、人々があなたがたを、会堂や役人や権力者などのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配するには及びません。12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。』⇒だから、パウロなどは、このように告白してくれているのです。『ピリピ 4:13 で、『私は、私を強くしてくさる方によって、どんなことでもできるのです。』って…。聖霊なる神様が、私たちの内に居て…。励ましを与え、話すべき言葉を与え、勇気と力、平安と信念を与えてくださるのです！

でも、問題は私たちです。聖書のみことばに照らし合わせるなら、皆さんも、このような、ペテロやパウロが受けたのと全く同じ、聖霊なる神様を…。また、その力を…。もう既にお受けになっておられるはずですよ。皆さんは、こんなことを経験されませんでしたか？「神様を第一にして歩んでいきたい！」のように願われるのです…。生まれながらの私たち人間は、そんなことを願いません。だって、神様よりも…。神様のみこころよりも…。自分自身の願いや考えの方が大事だからです。しかし、聖霊が私たちの内側に入ってくさると、自分のことよりも、神様のことを優先しようとするのです！それが、私たちが救われたという、1 つの証拠なのです。

<励ましの言葉>

1 ヨハネ 4:13-16 で、どんなことが教えられていましたか？『13 神は私たちに御霊を与えてくださいました。それによって、私たちが神のうちにあり、神も私たちのうちにあられることがわかります。14 私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。15 だれでも、イエスを神の御子と告白するなら、神はその人のうちにあられ、その人も神のうちにいます。16 私たちは、私たちに對する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにあり、神もその人のうちにあられます。』

⇒イエス様を信じ、救われた者には、確実に聖霊なる神様が内に居てくださいます。でも、それだけではありません。そういう人は、必ず、神様を証しようとして。救われた者たちは皆、神様のことを話さずにはおれないし…。福音を伝えずにはおれないのです。だから、本当のクリスチャンたちは、どんな厳しい迫害の下にあっても、伝道しようとするのです。また、それだけではありません。こんな罪人の自分を愛し、救ってくださったという思いから、神様の愛にならって…。神の愛を実践しようとして。皆さんもそうでしょ？それこそが救われた、本当のクリスチャンの姿なのです。

かなり前のことですが、私はあるクリスチャンの方と話す機会が与えられました。その方は、現役で、司法試験にも受かったような…。所謂、天才型の弁護士の先生なのですが、その方は、こんなことをおっしゃるのです、「私の力なんて、大したことはありませんでした…。現に、この課題は余裕でクリアできると思うと、そういう課題に限ってダメだったりしました…。しかし、そうではなくて…。神様の力を頂こうとして、100%の努力をすると、自分の力の何倍ものことができました。しかし、99%だと、それはそのまま、99%なのです。神様の力を頂くには、神様の前に祈りつつ…。自分ではどうしようもないことを認めて、精一杯の努力をすることだと思えます。」…こんなことをおっしゃるのです。

皆さん、知っていました？…最近、一部のキリスト教会では「信仰生活は、すべて神様がなして下さるから、私たちは努力しないで良いんだ…」ということを教えるのだそうです。でも、聖書のみことばは、私たちに選択することはもちろん、努力すること…、また、忍耐し続けることを教えてくれているのではないのでしょうか？例えば、I コリント 9:24-27 です。『24 競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。25 また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。26 ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。27 私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。』⇒確かに、神様は、私や皆さんを助け…、力を与えてはくださいます。しかし、それは、私たちが自由意志の無いような…、ロボットにしてしまうということではありません。神様は、私たちの意志や選択、また努力といったものを用いてくださるのです。神様は、皆さんが努力して、神様のために力を尽くして生きていこうとする時に、神様に従っていこうとする時に、本当の助けを与えてくださるのです。

私たちの問題と言うか、弱点は、つい自分の力で…、また、自分自身の方法で生きていこうとしてしまうことです。しかし、その行く先には必ず壁があり、挫折があるでしょう。また、例え、そこに栄光があったとしても、それは神の栄光ではなく、その人自身の栄光です。そんなことのために、神様は私たちを救い…、私たちが生かしてくださっているではありません。

どうか、私たちを愛し、救ってくださった神様の栄光を現わしていくために、みことばに従って生きていく者であってください。私たちの行く道すべてを、御霊なる神様に明け渡して、すべてを神様にお委ねして生きていく者であっていただきたいと思います。

そうして、まだ、イエス様を信じておられない皆さん。神様は、あなたのことも救い、あなたを変え、あなたを祝福して、神の栄光のために用いたいと願っておられます。どうか、この神様のことを拒むことなく、1日も早く、イエス・キリストを真の神、あなたの救い主として迎え受け入れていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。